

国際共同研究交通費補助 研究成果報告書

(適宜行追加可)

所属・職・氏名	人間福祉学部 専任講師 市瀬晶子
共同研究者 所属・職・氏名	Mälardalen University, School of Health, Care and Social Welfare Associated professour Els-marie Anbäcken
研究課題	認知症の人のエンド・オブ・ライフケアの構築—日本とスウェーデンのグループホームにおける調査を通して—
共同研究 実施期間	派遣期間： 年 月 日 ~ 年 月 日 招聘期間： 2019年 11月 7日 ~ 2019年 12月 11日
共同研究 実施場所	関西学院大学・人間福祉学部

1. 研究の成果（本共同研究によって得られた新たな知見、成果等を簡潔に記述してください。該当しない場合は「該当なし」と記載してください。）

(1) 学術的価値（本研究により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果）

本研究では「認知症の人とその家族、支援者が関わり合う接面に何が生じているのか」を明らかにするため、2019年11月11日から12月10日の間に兵庫県内のAグループホームにおいて約90時間の関与観察調査を行った。その結果、①入居者同士の相互作用では、居室が隣り同士のある入居者たちは、食事に連れだって行き、会話を通して意味のある相互作用を行っていた。他の入居者は、目で一瞥することによって拒否したり、受け入れたり、笑い声を上げたり、怒ったり、相手を刺激するような言葉を言うことによって、人間として承認されたいという欲求を示していた。②入居者とスタッフの相互作用では、スタッフは、ある入居者が他の入居者の食事を取ってしまったとき、ジョークや笑顔によって訂正し、対立するような状況を回復させていた。またスタッフは入居者に洗濯物をたたむのを頼んだりすることによって、入居者同士の相互作用を手段的にも支えていた。③入居者と家族の相互作用は、今回の調査では最も観察できたことが少なかったが、家族がどのくらい頻繁に入居者を訪ねるか、入所以前の関係がどのようなものかによって、相互作用が明らかに異なっていた。

今回の関与観察からは、入居者とスタッフ、家族が関わり合う接面で起こっていることは、個人的要因、システムの要因によることが示唆された。個人的要因は、認知症が影響しており、認知症が喜び、悲しみ、怒りにおける敏感さを生んでいる。認知症の人がもつその脆さを支え、落ち着かせ、転換するスタッフの役割が見られた。また、誰かが誰かを落ち着かせるような行動をしたり、状況を良くするのは入居者の間でも時折見られた。システムの要因は、そうしたサポートができるように勤務時間が計画されているかどうか、あるいはそうした大切にすべきことを実行するのに限界があることが考えられた。

今後の調査では、さらに日本とスウェーデンのグループホームにおいて関与観察を続け、認知症の人と家族、スタッフが認知症とともに生きる枠組みをどのように作り上げているのかについての知見を明らかにしていく予定である。そして、得られた知見により、本研究の成果として「認知症の人のエンド・オブ・ライフケアとはどのようなものなのか」を提示したいと考えている。

(2) 相手国との交流（海外の研究者と学術交流することによって得られた効果）

今回のアンベッケン准教授の来日により、リンショーピン市の高齢者施設の利用者のデータ、スウェーデンの高齢者サービスの根拠となっている社会サービス法、サービス利用までの手続き、スタッフの教育内容等、スウェーデンの高齢者福祉を把握するための基本的情報を提供してもらった。

また、調査先のグループホームの家族会では、家族の方々からアンベッケン准教授に対しスウェーデンの高齢者福祉の現状についての質問もたくさんいただいた。質疑応答を通して、入居者の家族の方々にとっても、認知症の人にとってのよい環境とはどのようなものを考える機会となった。

(3) 社会貢献 (社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献)

今回の調査では、グループホームでの看取りに立ち会うことはできなかった。しかし、ターミナル期に入ったとみられる入居者が1名おり、これまで過ごしてきたグループホームの居室で家族が付き添い、訪問看護を受けながら終末期を過ごしていた。グループホームではエンド・オブ・ライフケアは、日常生活の中で行われている。日本では「人生の最終段階における医療に関する意識調査」(厚生労働省、2017)によると、末期がん、重い心臓病、進行した認知症のどの場合でも、最期を迎えたい場所は63.5~78.9%の人が自宅を希望しているが、1990年以降日本人の死亡場所は7割が病院となっている。近年は高齢者福祉施設での看取りも若干だが増えてきており、看取りに必要なのは必ずしも病院の環境ではなく、終末期における医療やケアの内容や質が重要である。終末期における医療とケアの内容や質、それを提供するシステムを含めてエンド・オブ・ライフケアとはどのようなものかを本研究の成果を通じて示すことができれば、人々が安心して最期まで自宅や施設で過ごすことができる枠組みを提示できることになると考えている。

(4) 若手研究者養成への貢献 (若手研究者養成への取り組み、成果)

申請者自身が若手研究者であり、日本とスウェーデンにおいてエスノグラフィー研究の熟練した経験をもつアンベッケン准教授とともに調査・研究を行い、その手法から学ぶことで申請者自身の研究者としての養成ともなっている。

(5) 将来発展可能性 (本研究を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

本研究の今後の展開では、アンベッケン准教授が関与観察の調査を行ったAグループホームで、次は申請者(市瀬)が2月10日~3月上旬にかけて約90時間の調査を行うことを計画している。また、申請者は2020年4月~2021年3月までスウェーデンのLinköping市にあるJärdalavägen Care home for older persons、Västerås市にあるGryta Demenscentrumでもアンベッケン准教授とともに関与観察調査を実施する予定である。日本人とスウェーデン人の研究者が同じグループホームで関与観察を実施し、それを比較することによって、日本では自明であるがゆえに見えなくなっている日本人の認知症の人と介護者の関係性の特徴、文化的環境、社会システム、社会の価値基盤を明らかにしたいと考えている。それによって、日本で自明となっている要介護者-介護者の関係性やシステム、価値基盤を問いなおし、認知症とともに生きることを保障するためにどのような関係性、社会システム、価値基盤の枠組みが必要なのかを検討していきたい。

(6) その他 (上記(1)~(5)以外に得られた成果があれば記述してください。)

例: 大学間協定の締結、他事業への展開、受賞、産業財産権の出願・取得等

該当なし

2. 研究発表 (本共同研究の一環として発表 (予定含む) したものについて記述してください。なお、印刷物がある場合は1部添付してください。)

例: 共著論文、口頭発表、出版、ポスター発表

本研究を通して得られた知見は、2020年度はスウェーデンの高齢者福祉学会において、2021年度は日本社会福祉学会、国際老年学会等で口頭発表もしくはポスター発表にて報告する予定である。